

◆「動脈硬化遺伝子」を解明

動脈硬化や心臓肥大などをもたらす可能性のある遺伝子を、東京大学医学部の永井良三教授らが新たに突き止めた。この遺伝子の働きを妨げることで動脈硬化が抑えられることも、マウスを使った実験で確認した。8日付の米科学誌ネイチャー・メディシン(電子版)に発表する。

これまでの研究で「アンジオテンシンⅡ」と呼ばれる遺伝子が動脈硬化などにかかわりが深いことがわかってきたが、研究チームは今回、アンジオテンシンⅡが「KLF5」という遺伝子に働きかけ、このKLF5が、動脈硬化につながる細胞増殖や、炎症などの指令を出していることを突き止めた。